



保 育 の 充 實

六月二日千葉県成田町において開催の
関東保育協議大会における記念講演

倉 橋 惣 三

本日は久し振りにみなさんとおめにかゝり、元氣な御顔を
拝見出来大変うれしいと思います。ことにこの成田幼稚園に
は親しい思い出がありまして、三十余年前に日本の幼稚園の
中で、庭の美しい幼稚園として、この幼稚園を紹介した事が
あります。その後ずつとこの幼稚園の庭の様子は私の頭から
去らないのですが、今再びこゝにお訪ねする機会を得て、昔
通りの綺麗な庭を拝見出来たのは、非常に楽しいことに思
います。

さて、本年はフレーベル先生の歿後百年忌にあたります。
それで世界の各国で、先生を記念するための色々な会が催さ
れます。日本でも方々で行われる予定であります。

もし本日の会合が百年前でしたら、必ず先生をお招きにな
つたことと思います。

我々はフレーベル先生を幼児教育の先達として非常に尊敬

している。ところが一般的にはフレーベル先生の名前がそれ
程よく知られているとは思われません。教育者の名前をよく
理解しないのは我国一般社会の風潮で、いたし方がないとい
えばいえるが、知識界の人にも時たまフレーベルという名を
知らない人があります。先達もある人と話をした時、フレー
ベルつて神田にあるあれですかという話だつた。(笑声)これ
には呆れました。

そこで今年の百年祭を機会に、フレーベル先生の名前を一
般に知らせるようになければいかぬと思います。それで今
月(六月)の二十一日が先生のなくなつた日ですが、私共と
しては二十三日にお茶の水で記念講演会をやる予定でありま
す。『幼児の教育』でもフレーベル記念特集号を出しました。
又、二十四日にはNHKからドラマチックにされたフレーベ
ルの話が放送されます。この人の名をひろめる事は幼児教育

の精神をひろめる所以であると思ひ、及ばずながら力をいたしてゐる次第であります。

さて、このフレーベル先生は、幼稚園の、何と申しますか、開祖、あるいは元祖もおかしいが、とにかくはじめて幼稚園をはじめられた人だという事はよく御承知のことです。

しかしフレーベルがはじめてブランケンブルヒに開いた小さなキンダーガルテンにしても、又、晩年にリーベンスタインに開いたキンダーガルテンにしても、その実際は、今日少くも我国において幼稚園といわれているものと必ずしも同じ外観のものではなかつたようです。ブランケンブルヒに開いた幼稚園の場所というものは今もなおのこつてをりますが、まことにさゝやかなのに私も驚いた位でありまして、幼稚園のために特に設計されたというようなものではない。まことにヘンビな小さい建物にすぎないのです。リーベンスタインの場合は、既に有名なものでしたが、そこに集つてゐる子供達はどうな子供達だつたかという、当時の模様を詳かに書いたものによると、殆んどみなハダグの子供でした。着物もロクに着てゐない子供が多かつたらしいのです。田舎の子供達でとにかくあまりキレイな子供はいなかつたのであります。だから若し、問題の理解というものを周到にしない人があつて、このキンダーガルテンを見たら、これは一体幼稚園だろつかということになりはしないかと思われれる位です。これは

幼稚園というよりも、むしろ保育所だ。託児所だといふかも知れないと思ふのです。キレイな子供、可愛い子供はいない、外見みすばらしい子供達の集合であつた。従つてフレーベルが幼稚園をつくつたという歴史において、それは少くも今日世人が普通に考へてゐる幼稚園とはちがつていました。

先程、私もし百年前であつたら今日のこの会合にフレーベル先生をお迎えするだろうといふましたが、もし今日、フレーベルが日本に来たら、日本の保育界の盛んな有様におどろくことでしょう。フレーベルの晩年には、幼稚園禁止令が出てフレーベルを悲しませましたのですが、そういう悪い状態の下で、難儀して幼稚園教育をやつて来たフレーベル先生からみたら、現在の日本の幼稚園教育の発展ぶりは、まことに感慨無量なものが御座いましょう。

ところで、仮りに若しフレーベル先生が、私共に、日本の保育の状態を話せということになつたら一体どうお答えすればよいか。その時は、日本には色々な名前のキンダーガルテンがある。あるものは幼稚園と訳してゐる。又あるものは保育所といつてゐると申上げましょう。そしてそれから先のことについては、大体、そういう区別を全く念頭におかなかつたフレーベル先生にどうやつて説明したらわかつてもらへるか一寸見当がつかないと思ふのです。これらは管理と制度の問題です。本質的にはどういふちがいが兩者の間にあるのか、

私にもよくわからないのですが、幼稚園の先生は教諭と称し奉り、（笑声）保育所の方は昔ながらの保母という、このちがいは、私の流暢なドイツ語を以てするも、到底フレイベル先生に理解してもらえないのではないかと思ひます。

フレイベル先生のはじめたものは、幼稚園原理——つまり幼児教育の根本原理であります。根本原理の実現であります。フレイベルを幼稚園の元祖といつて、保育所の方はたかだか叔父さん位にしか考えていないといふことであれば、子供を愛する事のみ知つてゐるこの大教育者をして、徒らに理解に苦しませる事になるのではないかと思ひます。少くも百年以前をふりかえつた私のイマヂネーションにおいて、そういう気がします。

同時に又、フレイベル先生は、つゞいて我國の幼児保育界の実情、将来についていろいろな質問をされる事と思ひますが、たとへば施設の数なんかについても、ホウ、それは大変な数だ、そんなに盛なのかと驚かれるにちがいない。又、その制度の問題、幼稚園は学校教育法で管理され、保育所は見童福祉法で管理されているというようなこと、実に立派に行き届いてゐると感心されることで御座いませう。又学問的研究もよく行われてゐる、實際家、学者による研究の成果が続々と發表されている。実に盛な事だと驚き、且つその点については大によろこばれるにちがいないと思ひます。

しかしながら先生は、更にこういわれるにちがひありません。成程大変盛だね、だが一体その實質についてはどうだろうと。

保育の問題ということを社会的に考えました場合は、制度法令というものは勿論大いに大切なものにちがひありません。しかしながらフレイベル先生は端的に本質をお考へになるにちがひありません。その時に私は一体何といつてお考へすれば一番よろしいか。その時はみなさんとよく御相談して、その御相談した結果を、お考へする外はありません。この間中、二度もアメリカから教育使節団が来て、日本の幼児教育についても話しあいました。その人達は制度、法令、数の統計、こういうものに非常に興味をもつてをられましたから、私も専らその点を話しました。しかしながら、その使節団の人達が日本の幼児保育の充実さ加減如何という点について深く聞かれたら私は何と答へたらよかつたでしょう。そういう本質を突込んで問われたいのはアメリカの人達のエチケツトかも知れません。人のことについて、あまり穿つた質問をするものではないという心配りからであつたかも知れません。そういう意味で問われなかつたのかも知れませんが、しかし、フレイベルのように物事の真髓に突入しないでをられない人にとつては、——自分の考へが自國にとり入れなければ、他の國に行つてまでと考へた、禁止令が出てからも、先生をとりかこんだ人達も、そんなものに構わずに大

会を開いて話をきいたというような、そういう真髓に即して、保育を見、保育を考える人にとりましては、実質の充実という事を必ず問われるにちがいないと思うのです。

さてその場合、私はどう答えるだろうかとということなんです、その時私は、制度組織のことは多少の喰いぢがい、ぶつかり、あいというものもあるか知らんが、それは先生が外から御らんになつて程のものではないとお答えしましょう。しかし保育実質の充実という点については、フレイベル先生のお求めなされるように充実していると答えるべきか、又は必ずしもそうとはいえない事を遺憾とすると答えるべきか、一寸迷うのです。

勿論、迷うと申しましたが、私は日本の保育の実質が、みなさんの力で立派にやられているということを否定するものではない。成田の山口政子先生のような人、その他同じような先輩をピツクアツプすれば、フレイベル先生の前に出ても立派に吹聴出来る人が沢山あると思う。年齢的にわかい人であつても今やつてゐる事を紹介すれば、立派に申し開きは立つと思う。しかしそれは制度とか組織とかいう程ハツキリした事ではないのです。だからこの問題は時に世間の人、保育界以外の人のいうことに耳を傾むけるだけではなく、幼稚園、保育所の人達そのものが反省せねばならぬ。しかし世間映えのしない方面の反省は、断食をしたり、水ごりをとつたりし

て、しつかり、反省する必要が時々あるのぢやないかとも思っています。(笑声)

実質の充実の問題ですが、充実しているというのは保育としてはあたりまえの事だといえる。あたり前のことを、あたり前に説明する事はむずかしいから、反対の方から考えをすすめて行きますが、充実していない保育とはどんなもの进行うか。

いねむり保育であり、ぼんやり保育であり、うつかり保育であるというようなものはどうでしょう。——もともと保育とはみなさんと幼児の間のことですから。兩者の間の事実である。手を叩いて音が出た場合、どつちの手から音が出たのかというようなもので、片方だけでは保育は出来ません。幼児と先生との間にある。そこで見地を少し改めて、充実するといつてもいろいろあります。願望の充実というのもあるうし、肉体が充実するというのもある。「私の頃大分身体が充実してよ」なんてのもある(笑声)しかし教育、保育における充実ということになれば、幼児教育における充実ということになれば、それはつまり創造的、自発的の充実のみ考えられる事ではなからぬ。従つて充実せる保育において、保育を構成する先生と幼児が夫々に創造的自発的であるのでなければならぬわけになります。

一体、フレーベルという人の偉いところはどこにあるかと申しますと、いろいろな事が数ぞえられるでありましようが、幼児の自発という事をモトにして幼稚園を考え出したという点であります。如何に、子供にしようか、如何によい子にするかという事は、必ずしもフレーベルを待たずとも離れでもの問題です。しかし幼児の創造性をハツキリと強い信念をもつて認めたという点は、実にフレーベルの特色です。フレーベルの前にそういうものはない。リーベンスタインで子供と遊んだ時にフレーベルは七十歳でありました。余り子供と同じに遊ぶので世間では馬鹿爺といつていた。フレーベルの児童観は、たゞ可愛い、面白いというのではなく、子どもの心は創り出すものである。創造するものであるという信念です。フレーベルは非常に子供に親しんだ。しかも、その時のフレーベルの目には、田舎の子供の一人一人の心にある創造の力が強く感じられていた。それが先生の幼児への愛であつたのです。

ところで、フレーベルが幼児に自発的創造性というものをみとめたといつても、それは学問研究の結果というわけではありません。フレーベルは学者というよりも、むしろ天才であるという事を言う人もあるが、兎に角、私はこう信ずるのです。即ち、フレーベルその人の中に強い創造の心、創造の力があつた。自ら創造をよるこぶ人にして、はじめて他人の創造性をよるこぶるのです。

創造性のない親や先生は、子供をうるさがります。「何とお前はうるさい創造野郎だ。もう少し創造しないでお母さんの真似をしなさい。何とお前は創り出す力を余りに多くもちすぎてるんだ。もう少し創り出さなさいでじつとしていなさい」(笑声) こういう事で創造性を失つた父母は子供の創造性というものを頭からおさえてしまふが、フレーベルはリーベンスタインの子供の中に創造を発見したのであります。

フレーベルが自発的な学説をたてたのはフレーベルその人の中にそういうものがあつたからです。フレーベルは生い立ちから、又養育の關係から自然界とは關係が深い人です。だから自然の有つている創造性をよくわかつていました。若い時代には建築学者になろうとした時があります。それをテヨツトした機会からかわつて、家を組み立てるかわりに幼稚園を生み出した。建築者になろうとしたフレーベルならば、幼児ビルディングでもつくればよかりさうなものなのに、幼児入れの箱をつくらないうで、自らのびて行く幼稚園をつくつた。フレーベルは詩的な人だといわれるが、それは美文をつくるとか何とかいうことでなくして、「園」ガルテンという字に自分の創造性をみただけであります。

フレーベルがはじめてキングダーガルテンという言葉を発表したのは、あたかも時、春のことであります。或る日、峠越しにブランケンブルヒへ来る途中「キングダーガルテン」と

いう言葉を感じていた。それが春であるところ、私は深い意味を感じております。おそらくツウリンギヤの森は新緑であつたにちがいない。全山こみどりであつたにちがいない。ツウリンギヤの新緑は美しい。成田の新緑のように美しい。そこで考えられたのが「園」という言葉だつたんですが、それは格別、美文とか何とかいうのではない。彼の心の中にある発達を愛する心であります。自ら自発するものではなくて、自発のよろこびはわかりません。自ら創造するものでなくして、創造のよろこびを解することは出来ません。こういう意味で、フレイベルは幼児の中に存する創造性をみた。あのハナタラシ、キカン坊が、何をしているかというようになことには捉われることなしに自分の創造力、燃え上るものを見たのです。

私はある外人と話をした時がある。その時は丁度燃えるような新緑であつた。私はその新緑のもつているムクムクともしり上げる生命力みたいなものに、打たれたが、私の英語ではその感じを相手につたえる適当な言葉がみつからない。そこで私は突嗟に「ハウ、ムクムク」とやつてみた。ところがこれが相手に通じたんですね、相手は「オー、イエス、ムクムク」と答えてくれました。(笑声)創造するもの、自発するもの、燃え上るもの、じつとしてをられない世界中の子供に共通なムクムク性というものをフレイベルは発見したのであります。我々は保育の充実という場合に、まづこのムクムク性か

ら出発して行かねばなりません。

保育というものは先生と子供のいわばぶつかりあいです。子供だけがムクムクしても、先生がムクムクしなくては何にもなりません。但し、ムクムクとたゞ肥つていっている意味ではありません。

幼稚園や保育所においては、勿論このムクムク性は自明のことになつております。みんなが理解している事になつてゐます。第一、看板に「ムクムク生長所」とかいてある以上、ムクムク性を理解していかないというような事はいえない。しかし実際はどうであるか――

子供がお話をしてくれという。「又、同じ話よ」と気のなさそうに言うけれども、同じ話でも、それを話すたびにどれ程創造性をもつて話すかによつて、同じ話でも新しい独創的なものとなつてくる。これは新しい話だといつても、独創性のない話し方をしてはダルクなりません。子供はその話から「そうですか」という理解は得られても自分のムクムク性が抑さえられるからちつともよるこばないということになります。話す方で独創性をもつて話をすれば、お爺さんは山へ、おばあさんは川へ……それを毎日のように話してもチツトモ古い話ではない。「今日はおもしろい話をして上げますよ。おもしろいはずの話をしてあげますよ」といつても、創造力がなかつたらその話はチツトモ子供をよるこばせない

のです。絵をかいたつて同じ事だ。子供は同じ絵を毎日かいてもその一つ一つがちがう。隠居がいつも同じのダルマの絵をかく事をおぼえて、来たものに一枚宛かいてやるというのとちがう。

私は保育の場面をみて、時にはなほだ哀愁を感じる時がある。子供をあつめてピアノを先生がひいています。子供がじつと先生の顔をみている。その子供の顔が言つてゐる、「それぢや先生踊れませんよ、何ならムリにおどりましょうか」(笑声) 先生の方にムクムクがあれば、幼児の方はダルクてもそれに引き入れられてムクムクして行く。何に一番それがあらわれるか。まづ朝の先生の顔です。モーニング・フェース、朝顔である(笑声) 子供によつては朝先生に「お早う」といゝかけて、その顔付をみて、一寸タチタチさせられる子供もいるか知れません。

幼児の自発性をその時、その場において出すということ、これが保育の要諦ともいふべきものでありますが、これは先生の問題です。その点フレibelに我國の保育の充実を聞かれて困る点もありはしないかと思うのです。

この間お茶の水で保育学会の大会がありました。その時の調査報告の中に、こういうのがありました。幼稚園にくるのがいやな子供が何人いるかというような事が報告された。私はその報告をきいて、いろいろな事が考えさせられました。

た。学者はそれを幼稚園教育の効果が上つていないというところで説明するかも知れません。だがそれを幼児の特性たる自発性という面から見る時、幼稚園にくるのがいやになつたという事は、一体自発性が止まつた事を意味するのか、または伸びた事を意味するのか。子供からいわせれば「今日もあの保育か」(笑声) ということで幼稚園にくるのがいやになるといふ子供もいるか知れぬ。自分の自発性がのびたために幼稚園にくるのがいやになつたというなら、それは見上げたものである。(笑声) 少くもその場合、先生と幼児の兩者の創造性、自発性がピツタリあわぬという事はいえると思ひます。

私は芝居が好きです。芝居のどこがいゝのかというと、色あるけれども、たとえは舞台の真中辺に誰れかゝいて、花道から出てくる人間を待つてゐる。じつとそつちの方をみている、あゝいうところがいゝ。そして花道から出て来て両方の眼と眼がパツとあう。「遅かりし由良之助」とか何とかいゝ乍ら見るんだが、あの時は両方の眼から火が出るような気がする。気がかゝつてゐる。あゝいうところが何ともいえません。保育の場合だつて先生と子供の気合です。向うから子供が「先生」とかけてくる。先生はそれをパツと受けて「オオ子供！」といゝかいわんか、とにかく両方で気合がある。双方ピシヤリとあえば充実した保育が出来る。それが合わないでグシヤリとしまえば、充実した保育は出来ない

ということになります。幼稚園にゐるのがいやだという子供は、先生との間にこういう気合がかゝらないのだと思ひます。それは多分先生の方に獨創性がないからです。自発性がないからです。

保育の充実とは、先生と子供の間に、日々に新たにくり返される保育であります。マンネリズムではない。日々に新しいのだ。真似保育ではない、創造する保育です。

最近カリキュラムに対する関心が非常に高まつて来たのは大いによろこばしい限りですが、そして又カリキュラムというものはいうまでもなく大切なものですが、それも「借りキユラム」では何にもならない。他人のつくつたカリキュラムをそのままに頭からまるのみするだけのものであつてはつまりません。情性保育であつては何にもならぬ。どこまでも燃え上る獨創の保育でなければいけません。

さて、我々は如何にしたら休むことなき自発性と獨創性をもつておつかつてくる子供達と共に、創造の保育、自発の保育をもちうるか——子供がとんで幼稚園、保育所にくるようになつて、あの町、この村、あの市の保育が行われるようになつたとき、はじめて日本の保育は充実したといふらうと思ふのであります。

長々と不充実のお話をしましたが、このあとは銚子の波に譲ります。(編者註。全員銚子にレクリエーションに行く予定になつてゐる)レクリエーションといふことは、娯樂とか

休養とか訳しては意味が足りません。レ・クリエーションで活力を再び出すことです。再創造です。銚子の波は勢がいゝ。ドンと来て、ドンと来る。それを、「あゝいゝ景色だがまた同じ波が寄せて来た」ではつまりません。波は一つ一つ新しいのです。しつかりレ・クリエーションしていらつしやう。

(記録責任者 西山浪太郎)

(拍手)

— 近 刊 —

小木曾光著

産聲より歌うまで

R 6一六〇頁 鎌價 二〇〇円

著者獨特の体験に裏打ちされた幼児の音楽指導書、この種の類書絶無である斯界に送る新風

内 容 大 要

- 7 6 5 4 3 2 1
- 産声より歌うまで
 - 聴かせる音楽
 - 動作にあらわす音楽(リトミック)
 - 弾く音楽
 - 歌う音楽
 - 創作する音楽
 - 一年の保育案

株式会社

フレイベル館

東京都千代田区神田神保町二ノ四